2023 年 10 月 14 日(土) つつじ読書会 ガルシア・マルケス『百年の孤独』

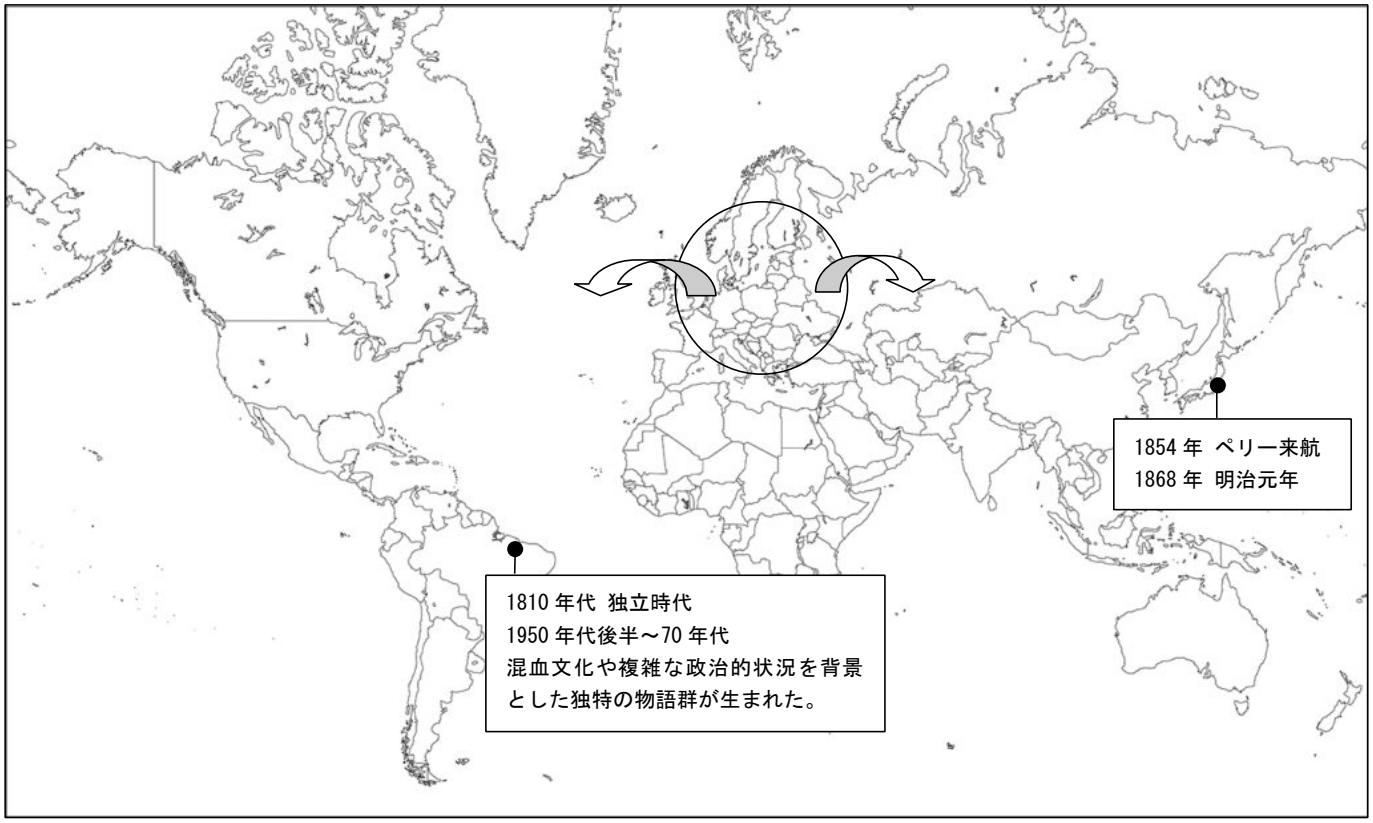
山口

● 論点

2022年11月19日(土) 『大人のための100選 ボルヘス(1899-1986)、マルケス(1927-2014) ラテンアメリカ文学を読む』大野秀さんの講演会を聴講して、ラテンアメリカ文学を興味深く感じた。以下、2点。

【 1 】[近代] の受容と展開が描き出されている

まず、『百年の孤独』はある一族の歴史を描き出きながら、同時に世界史の「ひとつの局面」を切り出していると、読むことができるのではないか。すなわち、ヨーロッパから広がった [近代] が、世界を席巻していく過程における、[近代] の受容と展開として考えてはどうか。



そこには、[近代] の支配が進行していく渦中の「足掻き = じたばた」を読むことができるのではないか。そして、この「足掻き」の文学は、ヨーロッパ [近代] が進出していったさまざまな場所で普遍性をもち、行き詰まりをみせる [近代] の枠組みに対する、別の枠組みの可能性をしめすのではないか。ガルシア=マルケスの文学を称して「魔術的リアリズム」というのは、この別の枠組みの可能性のことだといえる。たとえば、私たちの「生」をかたちづくる「時間」や「空間」は、ヨーロッパ [近代] のニュートン的な「リアリズム」では汲みつくせない厚みをもっている、ということに、この作品は立ち返らせはしないだろうか。(カルロ・ロヴェッリ(1956-)『時間は存在しない』は、まさにそのような書物であった!)

【 2 】支配のなかの足掻き

支配のなかでの足掻きは一筋縄ではいかない。

支配者に魅惑されたり、おもねったり、馴致させられたり、抵抗したりするが、歴史をひもとけば、支配に対して抵抗したとしても、いずれはじめの理念を失って、またもや別の支配へと変容する、ということが繰りかえされてきた。(ロシア革命(1917年)、) それは首の箝げ替えにすぎない。

また、支配者が被支配者と手と手をたずさえあうこともある。(『アラビアのロレンス』(1962) ???)

『百年の孤独』では、このような支配の渦中のさまざまな「足掻き」が、それぞれの幾世代にわたる登場人物に配役され、描き出されている。裏返すと、近代の「足掻き」は幾世代にもわたるのだ、ということ。

●[近代]の魅惑と陥穽

【 1 】ホセ・アルカディオ・ブエンディーアやウルスラの祖先には移民がいて、[近代] の申し子のような根刮ぎの存在。物語は、「メルキアデス」というヨーロッパ(スペイン???) 由来の名前をもつジプシーが、いろいろな利器をもちこむところからはじまっている。私はこの「メルキアデス」という外からきたものに、[近代] の象徴をみたいと思う。それは、はじめ「ホセ・アルカディオ・ブエンディーア」を魅惑する。
興味深いのは、[近代] が黒船来航のように、圧倒的な被支配者としてやってくるのでなく、むしろそれに魅惑されるように [近代] が入り込んでくる、という推移を描いているところがおもしろい。もちろん、それに対して、遠巻きに醒めた視線を向けるもの(ウルスラ)、取り込まれるもの(アウレリャーノ)、など著者はその受容の複雑さを複雑なままに描き出す。[近代]はいつのまにか周囲を包囲している、という感覚。

【 2 】次第にマコンドは [近代] 化していく。
「少なくともここしばらくは白日夢の悩みから解放されたかたちのホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、またたく間に秩序と労働をモットーとする社会を築きあげていった。そこでは、村の建設当時からにぎやかな囀り声で時を告げていた小鳥たちを放してやり、その代りに全戸にチャイムつきの時計をそなえるという楽しみしか許されなかった。」(p.33)
おもしろいのは、このあとで、「伝染性の不眠症」に町全体が冒され、物忘れが進行するというエピソードで、この物忘れの進行がくいとめられるのは、メルキアデスが持ち込んだ液体によるものだった。このあとメルキアデスは「銀板写真術」の開発をおこなう。
このエピソードから読み取れるのは、マコンドが、外からもちこまれた近代の利器を受容していく過程で、その近代の利器に、生活のさまざまなものを明け渡していき、その結果、むしろじぶんたちの能力 (記憶すること) を喪失していく過程だといえまいか。
日付や時間は「時計」に、思い出はいまやじぶんじしんのなかにではなく「銀板写真術」に代替されてしまう。

【 3 】ホセ・アルカディオ・ブエンディーア
ホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、メルキアデスの死のあとで、譫妄状態になってしまう。
印象的なのは、ホセ・アルカディオ・ブエンディーアは、じぶんが築いた秩序に苦しめられているように読める次のくだり。いまが何曜日かわからかず、アウレリャーノに諭され、「わしもそう思ってた。ところが、急に気づいたんだ。今日も、昨日と同じように月曜だということにな。空を見ろ、壁を見ろ、あのベゴニアの花を見ろ。今日もやっぱり月曜なんだ 」(p.63)

【 4 】自由派と保守派の戦争
[近代] の支配に対しての抵抗という問題が問われる。アウレリャーノは戦争のなかで、次第に達観、諦念していくようだ。「ひとつ教えてくれ。何のためにきみは戦っているのかね?」（p.107）被支配者が、たんに支配者と役回りを交代するのでなしに、支配 / 被支配 という構図、それじたいへの「抗い」に向かうことはできるのか。

> あなた方が聞いたようにこういわれている、『目には目、歯には歯』と。しかしわたしはあなた方にいう、悪者にはさからうな。あなたの右の頬を打つものには、他の頬をも向けよ。(『マタイによる福音書』5章38節～39節)